

# イタリア紀行

## その2



サンタ・マリア・デル・フィオーレにて

### <フィレンツェ>

フィレンツェへの道は雨であった。時折激しく窓を打つ雨に景色は霞んでいる。ベニスから4時間、バスは石畳の重厚な街並みへと入っていく。なぜか、人通りは少なく車の流れもスムーズである。フィレンツェの人々は、バカンスに出掛けたということだ。しかし、このことが後で私たちに「イタリア人は人生を楽しむために働く。」という言葉の思い知らせる序曲でもあった。

### ミケランジェロ広場

ミケランジェロ広場に続く坂道には高級住宅地が続いている。テニスコートが見えるが、すべてアンツーカーである。イタリアといえばサッカーであるが、赤土のテニスコートは整備されていて美しい。

ミケランジェロ広場に立ってフィレンツェの街を一望する。上空には、雨があがったものの厚い雲が覆っている。しかし、雲間から一条の光が差し街の一角を輝かせている。なだらかな丘陵に囲まれている盆地の底を、アルノ川の静かな流れが貫いている。ヴェッキオ橋をはじめ、意匠を凝らした橋たちが川に表情を与えている。街は赤褐色の瓦屋根に包まれている。建物の

壁の色調は統一され、私たちはルネッサンス美術の華開いた「花（フィオーレ）の都」を眼下に収めていることを実感する。

街の中心には、クーポラを戴いた花の聖母マリア大聖堂（サンタ・マリア・デル・フィオーレ）が空に浮かんでいるようだ。左に目を移すとヴェッキオ宮殿が城塞のようにそびえ立っている。

私は、学生時代に大文字山に登り、そこから京都の町を一望した時の震えるような感動を思い起こした。そして、次の言葉が脳裏に浮かんだのである。

「1504年秋、21歳のラファエツォが青雲の志を抱いてフィレンツエを訪れたとき、52歳のレオナルドは『モナ・リザ』に霊筆をふるい、30歳になんなんとするミケランジェロは巨像『ダヴィデ』を仕上げたところであった。そしてラファエツォは間もなく『大公の聖母』に着手する・・・」



ホテルの窓からの風景

## 雲間より日矢ドウオーモに輝きてフィレンツエの霧広場に漂ふ

### ホテル「アストリア」

ホテルアストリアは、フィレンツエの街の中央、ドウオーモへ歩いて5分の絶好の立地条件である。かつてここは修道院だったのだろうか。街の喧噪は一步ホテルにはいるとまるで音が吸収されたかのように静謐になる。人々は、回廊のような階段を登り、懺悔室に似た部屋を通り、今度は明るいパティオを巡ってようやく自分たちの部屋へと辿り着く。私たちには美しい花の壁画が描かれた部屋が用意されていた。

### 世界最古の薬局「サンタ・マリア・ノヴェツア」

さて、ベニスからの鉄道の旅を楽しんだ娘夫婦と落ち合っ、フィレンツエの街を歩く。私たちが最初に向かったのは、800年という気の遠くなるような歴史を持つ、世界最古の薬局「サンタ・マリア・ノヴェツア」である。修道僧たちが作る石鹸と、トスカーナの香に満ちたポプリが有名で、世界中に愛好者がいる。

しかしながら、やっとの思いでたどり着いた「サンタ・マリア・ノヴェツア」は、扉を固く閉ざしている。よく見ると、小さなメモが貼り付けてある。「バカンスのため8月末までお休み」とのことである。私たちは、扉の向こうから微かに漂ってくる香りに魅せられながらここを後にしたのである。



### 花の聖母マリア大聖堂

サンタ・マリア・デル・フィオーレ（花の聖母マリア）大聖堂の前に立つ。「花」（フィオーレ）は、フィレンツエ自身のことであり、咲く花の匂うがごとき繁栄の極みにあったこの町が、聖母マリアに捧げた大聖堂である。グリーン・ピンク・ホワイトの三色のコンビネーションが絶妙で

お洒落である。毅然として大空に屹立しているが、なぜか人を引きつける魅力がある。

私たちは、大円蓋に登ろうと順番を待つことにした。しかし、その列は幾重にもなり数時間もかかるという。そこで、隣接する「ジオットの鐘楼」に登ることにした。基礎部分は、繊細で物語性に富んだレリーフで美しく飾られ、高さは85メートル、414段の階段がある。うす暗く、降りてくる人々との交差もままならぬ狭い階段をひたすら登ること約30分、突如、大空と光に満ちあふれ、爽やかな風が吹き抜ける最上部に到着する。すぐ近くに大円蓋が圧倒的な存在感を持って迫り、フィレンツエの町は、「花の都」にふさわしい華やかさと落ち着きをもって青空の下に広がっている。

私たちは、登山にも似た快い疲労感に酔いながらルネッサンスの花の都の大パノラマを心から堪能したのである。



ウフィッツイ美術館からの風景

## これがイタリア

さて、翌日は「聖母マリア被昇天の日」で商店はすべてお休みとのことであった。そこで、フィレンツエにある超高級ブランド店巡り（もちろん買うことが目的ではない）をすることとなった。まずグッチ本店、「バカンスのため長期休業」、フェラガモ本店、「バカンスのため長期休業」、プラダ、「バカンスのため長期休業」、ブルガリ、「バカンスのため長期休業」、……つまり、名だたるブランド店はおろか、ほとんどすべての商店が「バカンスのため長期休業」なのである。

フィレンツエの町は、世界中からの観光客で溢れんばかりである。ショッピングを期待していた人々も多いはずである。しかし、人々は心から楽しそうである。それでいいのである。私たちは、花の都の石畳の舗道を歩いている。それで幸せなのである。「バカンスのため長期休業」だが、お目当ての店が開いていれば、その幸運に感謝すればよいのである。私は、そのわずかな幸運に出逢い、手工芸によるマーブル紙の文具を手に入れることが出来た。

皆がバカンスで楽しんでいるのなら、自分も楽しむ。人生は楽しむために働く。これがイタリア。

娘は言う。「イタリア人がお金儲けをする気になる頃、また来るわ。」けだし名言である。

遊ぶため楽しむために働くところがイタリア店なべて閉め

時計台時刻はなべて狂ひをりなぜか嬉しいイタリアの午後

## ヴェッキオ橋

ヴェッキオは古いという意味を持つ、フィレンツェ最古の橋である。1944年、ナチス軍撤退の時に唯一破壊を免れた2階建ての橋である。あの、ダンテがベアトリーチェと運命的な出逢いをしたアルノ川に掛かっている。

橋の上には数十軒の宝飾店が軒を連ねている。実は、私はここで金の細工品を買おうと密かに思っていた。夕陽に輝くショーウィンドーの中の金銀の宝飾品に心を奪われたが、残念ながら私の手に届くものはなかった。

「ヴェッキオ橋のような女」という言い回しがフィレンツェにはあるという。これ見よがしに宝飾で着飾った女性のことを言うらしい。私は、「ヴェッキオ橋の男」にはとうていなれそうもない。

## ウフィッツイ美術館

ウフィッツイ美術館はアルノ川沿いに「空中に建つかのような二つの翼廊」を持った、世界で最も重要な美術館の一つである。ここでは、西洋美術史上に燦然と輝く名作が、豪華に装丁された美術全集の1ページ1ページを繻くように系統的に、整備されている。

このウフィッツイ美術館の最大の特徴は、フィレンツェで生まれ、フィレンツェで育った芸術家たちの主要な作品を一堂に展示してあることである。長い中世に決別を告げたルネッサンス芸術の最高傑作が、その土地において鑑賞できるのである。



### 私の心に今も残っている作品を紹介する。

第1廊下には古代彫刻や胸像が整然と並べられている。「ヘラクレス」「アポロン」「バッカッス」「競技者」……。白と灰色の大理石の大きな四角模様様の床は、窓からの陽光を浴びて鈍く輝いている。

天井はフレスコ画で描かれた「メディチ家の紋章入りのグロテスク装飾」が美しい。風景・実在あるいは架空の動物・怪物・天使が所狭しと躍動している。



### 作品1 ジオット

#### 「マエスタ」(オンニッサンティの聖母)

マエスタは、「厳正なる聖母子」という意味を持つ。左脇に立つ天使は聖母に尊い冠を、右の天使は幼子イエスに受難のシンボルの聖体を差し出している。聖母子の足下では跪いた二人の天使がマリアのシンボルであるバラとユリを捧げている。描かれている全てのものが写実的で人間らしい存在感をもって迫ってくる。特に、威厳あるマリアと幼いながらも強いまなざしのイエスが印象に残っている。

作品2 シモーネ・マルティアーネ  
「受胎告知」



繊細で優美な後期ゴシック様式の代表作である。燦然と輝く黄金色を背景にして受胎を告知された聖母が身をよじっている。天使から告知された事実を認めたくはなく、避けようとしているようにも見える。聖母の顔には戸惑いと、深い憂愁にあふれている。

また、天使の言葉が吹き出しのように聖母に向けて文字で描かれている。ここには、劇場的な臨場感にあふれている。

作品3 ピエロ・デッラ・フランチェスカ  
「ウルビーノ公爵夫妻の肖像」



二人は静かに互いを見つめ合うように並べられている。ウルビーノ公爵の真紅の帽子と服が鮮明な印象を与え、騎士合戦の際に折れたという鼻が正確に描写されている。目尻のしわと慈愛に満ちた瞳が人生の年輪を物語るかのようである。婦人の横顔は陶磁器のように白く滑らかで、信頼にあふれた微笑をたたえている。背景には地平線の彼方まで続く風景が克明に描かれている。

作品4 フィリッポ・リッポ  
「聖母子と二天使」



このように魅惑的な聖母を見たことがない。思わず吸い込まれるような優美で清らかな面差しである。髪は気品ある真珠で結われている。深い緑の質素な衣服に身を包んでいるが、少しくつむきかげんの潤いのある瞳と、細かいあごの線が完璧なまでの女性美を表している。

こちらを向いてにっこり微笑んでいる天使も可愛らしい。



作品5 サンドロ・ボッティチェッリ  
「ホロフェルネスの遺骸の発見」  
「ユディットの帰還」

ボッティチェッリの若き日の作品である。  
美しい未亡人ユディットに寝首を掻かれたホロフェル  
ネスの遺骸の裸像が何ともリアルで痛ましい。

一方、ユディットは、切り取ったホロフェルネスの首を侍女に持たせて、ホロフェルネスの  
剣を右手に、平和の印であるオリーブの小枝を左手に持ちながら凱旋している。

聖書のヒロインであるユディットは弱者を勝利に導く美德と正義のシンボルである。



作品6 サンドロ・ボッティチェッリ  
「ヴィーナス誕生」

芸術とはかくも魅惑的で甘美なものなの  
か。静かな大海原を背景にして、貝殻の上に  
立った金髪の美しいヴィーナスが、優しく抱  
き合う風の神ゼフュロスとアウラが吹いて  
起こす波に押されて岸边に向かってい。空

からは淡いピンクのバラの花が舞い落ちている。陸地では、ヒナギクと花々が刺繍された絹の  
マントを持ってヴィーナスを迎えているのは女神ホーラであるという。

裸身のヴィーナスは崇高な愛を象徴していると感じた。



作品6 サンドロ・ボッティチェッリ  
「春」

中央に美しい衣装をまとったヴィーナスが  
立っている。ここは、彼女の庭園であり、春  
爛漫の花々が美しく咲き乱れている。

右手では、森の妖精クロリスが風の神ゼフ  
ュロスの求愛を受けて花の女神フローラに変

身している。彼女は謎の微笑をたたえている。左手の三人の乙女は、ヴィーナスの侍女で三美  
神と呼ばれ、自由を象徴するという。左の男性はゼウスの使者メルクリウスといわれている。

今日でも論争中の表現力に満ちた名作を前にして、目眩にも似た感慨に耽った。



### 作品7 レオナルド・ダ・ヴィンチ 「受胎告知」

静謐な夜明け、厳粛な事実が聖母に告げられている。天使の緊迫した表情と、聖母のすべてを受け入れた余裕のある態度が対照的である。天使が舞い降りた草地には美しい花が咲いている。向こう側には、トスカーナ地方を象徴する糸杉が見える。湖畔の町並みと遠くの青みがかった岩山が精緻に描かれている。

この作品の前に立つと、思わず背筋をピンと伸ばさずにはいられないような敬虔な気持ちになる。



### 作品8 レオナルド・ダ・ヴィンチ 「東方三博士の礼拝」

三人のマギ（博士）が星に導かれて聖母子を訪れるという有名な主題である。この作品は、アウグスティヌス修道会がレオナルドに発注したものの、彼が翌年にミラノに出発したために未完成のまま残されたものである。

未完成とはいえ、いや、未完成だからこそ、この「東方三博士の礼拝」は私に圧倒的な迫力で襲いかかってきた。他の「東方三博士の礼拝」とは、全く異質なのである。

聖母子を取り巻く人々に見られる、苦悩・困惑・驚愕・煩悶・恐怖・・・これはいったい何なのであろうか。渦巻きにも似た混沌は今も私に衝撃を与え続けている。



### 作品9 ミケランジェロ・ヴォナローティ 「トンド・ドーニ」(聖家族と幼い洗礼者 聖ヨハネ)

フィレンツェに現存するミケランジェロの唯一の作品である。1500年代の最も重要で謎に包まれた作品であるという。

遅しく美しい聖母が聖ヨゼフから幼子イエスを受け取っている。あるいは、渡しているのか。絡まるような三人の姿は、彫刻像のような存在感がある。

そして、後方には欄干にもたれたり座ったりしている五人の裸の若者がいる。その中の一人、右手の人物の射すような眼差しが強烈である。この作品のテーマは何なのか、深く考えさせられた。



## 作品10 ラッファエロ 「ヒワの聖母」

フィレンツエに来て一年、若きラッファエロの情緒に満ちた作品である。聖母は本を手にして座っている。その膝の間に立つ幼子イエスは、洗礼者ヨハネが持つヒワ鳥をなでている。幼子たちは互に見つめ合っており、それを聖母は優しく暖かく包み込んでいる。

イエスの足は、聖母の素足の上に、そっと置かれていて、肌のぬくもりが感じられる。慈悲に満ちた聖母のたたずまいは、永遠の名作といわれるにふさわしい。

## サン・マルコ修道院

サン・マルコ修道院へは、フィレンツエの中心ドウオーモから北の方角に歩いて行く。フラ・アンジェリコの「受胎告知」に逢いたかったからである。歩くこと約20分、修道院は訪れる人も少なくひっそりと佇んでいる。回廊に囲まれた中庭は、可憐な花々に彩られ明るい陽光に輝いている。白い壁と赤褐色の瓦屋根が絶妙のコントラストで美しい。

フラ・アンジェリコは、「天使のような修道士」という意味をもつそうだ。彼は、フィレンツエ大司教の座を辞退し、ここサン・マルコ修道院の壁画装飾に献身的な努力を惜しまなかった。回廊や当時の巡礼者宿泊施設には、多くの祭壇画が集められている。

さて、二階に続く薄暗い階段を上ると明かりが差しており、見上げると「受胎告知」が私たちを待っている。途中の踊り場に立ち止まり、その清楚な美しさに息をのむ。その出逢いは鮮烈である。フラ・アンジェリコは下から見上げる視線を意識してこの壁画を創作したのではないかとさえ思った。

階段を上りきり、「受胎告知」を独り占めする。清楚な美しさに、思わず敬虔な祈りを捧げたくなる。

## 薄暗き階段のぼり出逢ひたり 光あつめし「受胎告知」に



階段上で出逢う「受胎告知」